

続

徒然
つれづれ

政治の舵取り

桑野 巍

政治や社会が一大変革期を迎えているなか「やはり政治がもっとしっかりしなければ」という政治不信の声が聞こえてくる。格差社会が一段と進んでいる、失業率が依然高い、悲惨な事件が多発、デフレスパイラル現象の進化、温暖化など地球の環境悪化、教育の劣化、農業の疲弊などで、すべて政治の責任という街の声だ。不平不満組はいつの世でも多いということか。各種の情報が日本中隅々まで行き渡れば行き渡るほど不平不満組は加速度的に増えるから政治の舵取りは難しい。

住民というか有権者は勝手なもので、自分たちが選んだ政治家が死にもの狂いで日夜活動しているのに「政治はよく頑張っている」というほめ言葉を発しようとしな。いつの時代も“政治(家)は悪”なのだろうか。中には政治の人たちの公約は「膏藥に過ぎぬ」と手厳しい有権者もいて、政治を茶化す“俄評論家”になりすます者も散見される。

私自身は昨今政治家との付き合いはほとんどないに等しいが、先ごろ元代議士からかなり部厚い印刷物もらった。「この国の未来のために」というタイトルだ。彼は元大蔵省の出身で勉強家だ。それ故か印刷物は失礼ながらかなり理屈っぽい。総論として、日本の近代の幕明けから明治維新の成り立ち、そして大正デモクラシーから昭和へ入り、第二次世界大戦から終戦、55年体制へと続き高度経済成長からバブル経済の崩壊、金融危機と歴史を振り返り“反省の弁”を表現している。

この間、ご自分のものの見方を開陳しているが、官僚文化についても触れている。官僚文化は根本において社会主義と同根であると決めつけているのも注目だ。価値感の多様化した今日、ほとんどの国で社会主義体制が崩壊したことは、官僚がどんなに優秀で多くの情報を持っていても明日の売れ筋商品を言い当てることは不可能であると断定し、これから成し遂げなければならないのはこのような官僚文化を少しずつ、しかも着実に除去していくことであると主張しているのだ。また、現在のわが国の困難な点は明治維新や戦後の改革のように、わき上がる国民のエネルギーによって一挙に構造改革が出来にくい点にあると論じており、歯痒さをむき出しにして

いる。

彼の歴史観や政治論理は整然としていて示唆に富んでいると思ったが、なぜ官僚文化が築き上げられたのか、官僚文化と画一主義、輸送船団方式の集団保護主義はどう関連するのかにも触れてほしかった。とはいえこちらも理論武装が出来ているわけではないのだが代議士時代にもっと活躍の場があったはずなのにと考えた。

日本人の多様化についても、政治に対する根本が何であるかに触れ「国民に対する愛情」と説くが、これまで政治家自身の本心が究明されていたかどうか「政治は政治家の専売特許ではない」と自省しているところは好感がもてた。自省の一部では政治家はまず何を置いても不撓の勇猛心をもって自らを苦吟し、その中から国民にとって常住不変の真実相である国民的道標を見出し、それを国民に指し示さなければならぬと強調しているからだ。

高邁な印刷物を読み終えて自分なりに理解できたが、現実の政治展開に目を移すと少しばかりの離反現象に出会う。一つは政治家の考え方の中に赤字国債を増発し続けて財源を確保しつつ、消費税率等のアップの道筋をつけているのではないかである。二つ目は納税者番号制度の実現、三つ目は“大きな政府”設立への方向である。OB記者の予測は評価に値しないが、国民は間違いなく今年も政治の動向に向かっていると見る。

上品な表現ではないが、政治の世界は裏切り当り前、嫉妬、執念が渦巻いており小心者は耐えることが出来ない。初めて国会議員選挙で当選しても草むしりや雑巾がけが待っているとされるが、これに耐えても選挙で勝たなければ“すべては無”同然である。

賢人は「政治は誠治なり」というけれども年がら年中政治は流動的で「政治に完成品はない」に等しい。「政治家とは本来寒い職業」という人にも出合ったが、衆院や参院の専用食堂で食事をしている政治家の姿を見てきた者からすると「政治の人はいつも食欲旺盛、元気で熱い」。

(自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長)